

「知の技法の伝承」シリーズ⑫

「ハーンと漱石と」

文学部教授

福澤 清



熊本大学大学院社会文化科学研究科

FD 委員会編

まえがき

熊本大学大学院社会文化科学研究科長

伊藤洋典

今回で 12 回目を迎える知の技法の伝承シリーズですが、今年には福澤清先生による「ハーンと漱石と」と題されたご講演です。このところ、定年を迎えられる先生にお願いしてきた本シリーズですが、今年も例年どおり、永年本学で語学教育に携わってこられた福澤先生にお願いすることになりました。

ハーンや漱石といった超有名人がかつて本学の前身である旧制第五高等学校で教鞭を取っていたこと自体が熊大の大きな資産がありますが、これを資産として活用し、磨き、次世代に引き継ぐというのは本学に課せられた使命ともいえます。福澤先生と中心となった研究者グループがこの課題を引き受け、大きく発展させてこられたおかげで、本学は大きな「強み」をもつことができるようになりました。あらためて永年のご苦勞に敬意を表したいと思います。

ご講演の内容はハーンと漱石について自在に語るといった感じのもので、大変興味深い視点をいろいろと教えていただきました。個人的に感心したのは、漱石の『我が輩は猫である』がかのスターンの『トリストラム・シャンディー』を模したものではないかという指摘で、そういえば、面白いのだけれども何となくとりとめのな

い印象などはよく似ているなどと思いながら講演をお聴きしました。またハーンと英国の社会学者スペンサーとの関係などの指摘は、素人ながら文学の面白さを味わうことができました。

先生がご定年を迎えられるのは寂しいかぎりですが、いつまでもお元気で研究を続けられることをお祈りしています。最後に私事になりますが、福澤先生には私が熊大に赴任した 22 年前からずっとお世話になってきて、その先生が熊大を去るということにいささかの感慨を感じざるを得ません。月日が経つのは早いものです。この 22 年の年月に思いを馳せながらお聞きしたご講演でした。



ハーンと漱石と

平成 28 年度 知の技法の伝承研究会

社会文化科学研究科

文学部 福澤 清

目次

はじめに	4
漱石と正岡子規 （寺田寅彦・大谷正信／纏石・高浜虚子・河東碧梧桐）	5
漱石と米山保三郎	8
「ハーンと漱石と」（講演会資料より）	15
漱石とハーンの共通点	17
地震関係	17
漱石の文藝理論とその創作実践	24
ラフカディオ・ハーンの文体	26
ハーバート・スペンサーの 文体論の影響および短歌・俳句の翻訳	27
ハーンの熊本時代（1891年11月19日～1894年10月6日） の書簡から	29
主な参照文献	38
補足 あとがき	

はじめに

本冊子は、2016（平成28）年、10月17日（土）熊本大学法文棟2F 共用室で行なった社会文化科学研究科FD委員会（夙住 弘久委員長）主催の「知の技法の伝承研究会」にて講演したものに補足・加筆を施したものである。この年は熊本地震（4月14日の予震、16日の本震、その後の幾たびの余震）、また36年ぶりという阿蘇山爆発的噴火（10月8日）という未曾有の自然災害に遭遇した。他方、この年は夏目漱石（1867～1916）の没後100年、来熊120年、さらに2017（平成29）年が生誕150年という記念年に当たる。熊本大学の前身である旧制第五高等（中）学校でラフカディオ・ハーン／小泉八雲（1850～1904）も教鞭を執っている。また「災難は忘れたころに来る」という警句で関連付けられる寺田寅彦（1878～1935）も、周知の如く、同校の生徒の一人で恩師漱石の愛弟子である。漱石作品にも登場人物のモデルの一人としてたびたび登場する。ハーンとの接点では、漱石は、例えば弟子の一人に送った手紙の中で『怪談』は通読したと明記しているように、ハーン作品の愛読者の一人であり、作品や書簡・日記等でも時折、言及している。寅彦は、評判の高いエッセーの中で、専門科目（物理学）の指導教員であり、他方でローマ字論者でもあり、バイオリンの先生でもあった田丸卓郎（1872～1932）を追憶しているのみならず、英語と俳句の師である漱石については、生涯を通じて、兄のように（家族同然の如く）慕い続けている。寅彦には科学的な視点からの妖怪やお化けの話などもある。このように、三人にとり、熊本大学の前身・旧制第五高等（中）学校での3年から4年3ヶ月の生活には不思議な奇縁がある。

阿蘇山爆発的噴火では、漱石の『二百十日』の一節が思い起こされる。災害からの一刻も早い復興が望まれる。（因みに、寅彦関連で、自然災害は30年ごとに繰り返されるともある。）

「二人（佳さんと碌さん）の頭の上では二百十一の阿蘇が轟轟（ごうごう）と百年の不平を限りなき碧空に吐き出している。」

漱石の熊本時代で、特に筆者に印象深く感じられるのは、加賀(金沢)関係の同僚との謡曲に興じて日常生活からの心身の解放を行っていることである。漱石は、加賀宝生の謡曲のレッスンを、桜井房記教頭・後の校長から、同僚で耶馬溪探勝旅行の連れ合いでクリスチャンの英語教員奥太郎(1870~1928)と一緒に習った、と夏目鏡子の『漱石の思い出』にある。精力的に俳句を詠み、或いは、稀ではあるが短歌も詠んでいる。熊本時代の漢詩中には、最晩年の「則天去私」の片鱗が読み取れる、という指摘もある。さらには、熊本時代に漱石と正岡子規の人生を大きく変えたとされる、大愚・米山保三郎の死がある。漱石作品の中には、鎌倉や横浜を舞台としたものが少なからずあるが、米山の死後、漱石の妻鏡子の休養・保養を兼ねての時期、五高夏休み時分の俳句創作時期は、作家漱石誕生との重要な深い関わりがあるように思われる。ハーンにも鎌倉の大仏や横浜に纏わる名作がある。子規、漱石、寅彦、大谷正信と親交のある高浜虚子の記念館は鎌倉に現存している。

ハーンの後を追うようにして漱石が赴任する。その教え子である寺田寅彦も熊本に関連するしみじみとした随筆や俳句を残している。この三人は、文人でありつつ、一方で高度な科学的分析に少なからぬ興味を、他方で超自然的で不可解な怪異現象にも尋常ならざる関心を示している。不思議なことに、ハーン来日時時のトランクを引き下げた(同行の雑誌社お抱え絵描きウエルダンによる)後ろ姿の絵に象徴されるような孤独感・寂寥感がこの三人には共通して感じられる。

漱石と正岡子規

(寺田寅彦・大谷正信／鎌石・高浜虚子・河東碧梧桐)

夏目漱石(1867~1916)とラフカディオ・ハーン(1850~1904)の間には、周知のように、不遇な幼少年期、熊本大学の前身旧制第五高等(中)学校や東京帝国大学での教員時代、あるいは新聞社勤務というジャーナリスト時代などの人生体験や、異界や宗教・哲学に対する関心、人生観・宗教観、詩や小説、絵などを含む文人的生

活など何かと共通する面がある。極めつけは、雑司ヶ谷という同じ墓地に埋蔵されているなど幾つかの奇縁もある。

この奇縁のひとつには、正岡子規が介在する。ハーンと子規の間には直接の接触はないが、二人と漱石の間に寺田寅彦・大谷正信／纏石・高浜虚子・河東碧梧桐が深く関係してくる。

①俳句：ハーン作品の『*Kwaidan*(怪談)』(1904, M37) 所収の「*Jiu-roku-zakura*(十六桜)」では、そのタイトルに副題のような形で、「*Uso no yona/Jiu-roku-zakura/Saki ni keru* という句が、出典は明記されていないが、記されている。しかしながら、この句は、高浜虚子選『子規句集』には、「うそのような十六桜(いざよいさくら)咲きにけり」(1896, M29 年作) とルビつきで明確に紹介してある。さらにハーン関連の著作には、大谷正信／纏石(ぎょうせき)(1875~1933) 編集・訳注『小泉八雲・蟲の文学』(1921, T.10)、長澤純夫編訳『蝶の幻想 (*Butterfly Fantasies etc.*)』、(1988)、舟木裕訳『天の川幻想 (*The Romance of the Milky Way and Other Studies and Stories*, (1905))』(1994)などがある。これらの作品は、日本の伝統的な和歌・短歌・俳句などの詩歌や、中世の謡曲なども含めて、外国人としては初めてとあって良いほど詳細にハーンが海外に紹介しているものである。夏目漱石は、ハーン作品を「贅沢な英語」で海外に紹介してある、と評している。「小泉さんほど文章に贅沢な人はない」とも述懐している。ハーンの装飾的な優雅な文体から晩年の『怪談』などに象徴的な簡潔な文体を、漱石は堪能しているように思われる。

漱石の作品ごとの異なる内容や、作品ごとの著しい文体の相違・工夫には、ハーンの著作が少なからず影響を及ぼしているように感じられるのである。

大谷正信は、ハーンの松江時代の優秀な愛弟子の一人であり、ハーンの熊本第五高等中学校赴任の際には、島根尋常中学校の生徒を代表して送辞を送っている。後年、東京帝国大学入学後の学生時には、松江の実家(酒造業)の倒産に伴い、苦学生的身となる。ハーンの日本文化資料収集の手伝い係りとして貢献するが、その代わり、ハーンからの報酬(学資)のお蔭で無事、大学を卒業している。

漱石はハーン及び、その作品について 書簡・日記さらには著作等の中でも再三、再四言及している。学問分野、世界観、人生観など共鳴する部分がこの二人に窺えることは既に述べたが、共通の教え子や周辺の人物の介在や、共通する幼年時の不遇の生い立ちなども関連しているように思われる。

寺田寅彦は、五高在学中に授業や課外での英語のみならず私的に俳句の手ほどきも漱石から授かっている。さらに帝国大学入学の上京に際し、子規を紹介してもらっている。この当時、大谷纏石・高浜虚子・河東碧梧桐は三高在学中で既に子規門下であった。その後、学制変更の為、二高に移るが、子規の句会には参加するようになる。初参加は明治 29 年とある。この句会に寺田寅彦も参加するようになる。

漱石のロンドン留学からの帰国後は、千駄木住居と大谷の住居が近く、いよいよ親交が深まり、書簡のやり取りも増え、歳暮等の贈答も始まる。

ハーン死去後の大谷著書のハーンへの献辞に対して漱石も心中より喜んでいいる。同じ英語教師の絡みで、教え子や仲間の就職斡旋等の頼みごとなども開始されるようになる。

ハーン著作に日本の古典文学（和歌、短歌、俳句等々）の英語による解説・紹介があるが、子規は、周知のように、日本の古典文学（古今和歌集・新古今和歌集・和歌・連歌・俳句等）の再分類、再評価がある。共通のテーマ、課題に従事したことになる。

遡って、漱石は、1884（明治 17）年に子規と時を同じくして東京大学予備門予科に入学している。子規は 18 歳の時に幾何学の成績が悪くて落第しているが、この頃から俳句創作を開始。21 歳の時に社会進化論で有名なハーバート・スペンサーの文体論に関心を示す。いわゆる「短簡」のスタイルとの出会いである。子規という俳号は胸部疾患した 22 歳頃に使用し始めている。漱石とは、共通の趣味である寄席で親しく交わるようになる。漱石は子規吐血の見舞いの際に「帰ろふと泣かずに笑へ時鳥」「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」という俳句を送り、親交の度合いを増々深めている。1890

（M.23）年頃、子規の紀行文や書簡は戯文調であったが、謡曲の幽玄美に文学性を見出し始めている。大ひさし屋からの旅程を謡曲

「羽衣」まがいに仕立てている（「しゃくらの記」）。因みに、第一高等中学校卒業式の子規の証書は漱石が受け取ったそうである。子規は、この頃、松山出身の友人たちに謡曲の良さを学び楽しんだと、書簡や日記類にある。1891（M.24）春頃から謡曲が非常に好きになったともある（河東碧梧桐書簡）。

漱石の芭蕉、とりわけ蕪村愛好については、子規の多大なる影響があるが、俳句画帖『三愚集』を忘れる訳にはいかない。『小林一茶・句 夏目漱石・書 小川芋銭・画『痩せガエル』』という木版画がある。晩年の漱石は、結局芭蕉という枯淡、寂びの世界に回帰しているようにも思われる。

②漢詩：この頃、子規の『七艸集』に対し、「『七艸集』評」を漱石という署名で返している。漱石持参の九首の七言絶句に対し、「吾が兄のごとき者は、千万年に一人なるのみ」と絶賛する。子規の祖父は漢詩の先生ということもあって漢文には自信を持っていたが、漱石に感服した訳である。『七艸集』とは、漢詩、漢文、和歌、俳句、謡曲、論文、擬古体小説という七種類の文体で作った文集である。漱石は次いで『木屑録』という漢詩紀行文を子規に進呈している。

漱石と米山保三郎

米山保三郎（1869～1897）の、同じ哲学志望であった子規に哲学の道を諦めさせ、文学とりわけ、和歌や俳句という伝統的な日本の詩歌の革新に専心させた功績は大きい。さらに、大学予備門以来の学友で、建築家志望であった漱石を文学の方に進路変更させている。『猫』の三で「空間に生まれ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士 噫」「曾呂崎」稗として登場し、彼の腹膜炎による死について苦沙弥は大いに嘆いている。漱石は、「空間を研究せる天然居士の肖像に題す」として、後年「空に消ゆる鐸の響きや春の搭」という米山の追悼句を詠んでいる。漱石の円覚寺参禅は、米山の円覚寺洪川和尚参禅の影響とも言われている。米山は帝国大学大学院に進学し空間論を究めようとした明治30年5月29日に急死している。夏目金之助として熊本第五高等在職中のことである。

〔米山の死に対する、斉藤阿具宛て書簡(明治30年6月8日)参照〕

米山の名は、既に明治22年の『木屑録』にある。不思議なのは房総半島徒歩旅行に参加していない米山の名がこの『木屑録』に記されていることである。

〔この疑問点については、山影冬彦(2012)『漱石の俳諧落穂拾い 知られざる江の島 鎌倉 湯河原 句 漱石異説』彩流社 参照〕

大愚山人余同窓之友也賦性恬淡讀書澹禪之外無他嗜好一日寄書曰閑居無事就禪刹讀佛書時與童兒遊園捉蟬其高逸如此山人嘗語余曰深夜結跏萬籟盡死不覺身入于冥漠也余庸俗慵見露地白牛不顧無根瑞草 之山人有愧多矣 稗

〔漱石全集二十三卷 p28〕

〔大愚山人米山三郎はわが同窓の友なり。無欲恬淡、書を読み禪を講ずるのほか嗜好なし。ある時手紙をよこしてはいく、ヒマでぶらぶらいたしてをります。禪寺をおとづれ、また仏書を読み、時に子どもらと公園へセミとりに参ります、と。その高逸かくのごとし。或る時 余に語って曰く、深夜坐禅していると、外界の物音すべて消え、いつか別世界にはいりこんでゐるものだよと。われは俗物ゆゑ、露地の白牛とやら、無根の瑞草とやらの悟りの境地とほとんど無縁、米山大愚とひきくらべ恥ぢ入るばかりなり。〕

〔高島俊男(2007)『漱石の夏休み』ちくま文庫〕

漱石の鎌倉訪問は、円覚寺参禅 (M. 27) 以後、熊本五高奉職 (夏休み) 時を経て1911、1912 (M. 44, M. 45) 年の夏は友人の別荘に数日滞在、M. 45年には貸別荘に1ヶ月余り避暑に家族を挙げ行かせ、海で泳いだりして過ごしている。作品の中では、円覚寺『猫』『草枕』『夢十夜』、小坪『彼岸過ぎまで』、材木座『行人』、由比ヶ浜『こころ』を舞台にしている。

鎌倉の円覚寺と東慶寺は禅宗と坐禅の関連であるが、旅行先との関係では四度の京都訪問がある。旧制第二高の狩野亨吉表敬訪問もあるが、臨濟宗(禪)関係の神社・仏閣訪問であり、南画や襖絵、書画などの鑑賞もある。萬福寺なども堪能している。京都での体験は『虞美人草』などの作品に投影されている。

「ハーンと漱石とメレディス」

(くまもとハーン通信「石仏」No. 18 ハーン来熊 120 年記念号 pp. 42～45 より)

夏目漱石 (1867～1916) が特に影響を受けたイギリスの作家にジョージ・メレディス (1828～1909) がいる。メレディスの本を熊本の旧制第五高時代に漱石は既に購入している。また漱石日記によれば、直後の 1901(明治 34)年2月20日(水)の倫敦滞在中に、シェークスピア学者のアイランド人クレイグ先生を訪問した際にメレディスに関する質問をしている箇所もある。

「Craig ニ George Meredith ノ事に就て聞いたら少しも知らない。色々、言譯をした。英語の書物を悉く讀まねばならぬ譯はない。耻^{はじ}るに及ばぬ事だ。」

このメレディスを日本に最初に紹介した一人にラフカディオ・ハーン (1850～1904) がいる。「ジョージ・メレディスの詩」(ハーン著作集第 9 卷『人生と文学』恒文社、135～99 頁) の中からハーンのメレディス評や、その人柄や思想・見解を幾つか列挙する。

1. 現在 (1900 年頃)、イギリスで非常に人気のある詩人である。人気が出てきたのは、比較的最近のことであるが、彼の得意で確かな卓越性に基づいている。偉大な詩人であり、それまでの半世紀は小説家であった。今日 (1900 年頃)、頻繁に引用され、言及される作家である。イギリス文学の講義では無視できない。
2. 主にドイツで学び法律を勉強したが、大学を出ると法律を辞めて文学を志す。イギリスに戻り 1851 年に処女詩集を出版するが、全く注目されなかった。56 年に、『シャグパットの毛剃り』を出版。『千夜一夜物語』の模倣、アラビアの風物とアラビア人を題材とするお伽話の傑作。当時は人気がなく一部の批評家、詩人のみが評価。ハーンは、この種のものでは西欧作家の手になる最高の傑作と評価。
3. その後、イギリス人とイギリスの生活を全く斬新な目で探究。小説を書き始めるがあまり注目されなかった。あまりにも学者

- 的で心理的過ぎた。1862年に詩集『近代の恋』を出版。スウィンバーン（1837~1909）に認められるが、他には殆ど認められず、また小説に戻る。20年後『大地の歓びの詩』が出る。いくらかは、文人批評家のみの賞賛を得るが、その後、小説が続く。1887,1888年に『悲劇的生涯の歌物語』『大地を読む』という最後の詩を書く。晩年になって、ようやく陽の目を見た。
4. 優れた批評家なら「これほど素晴らしい詩人のこと、なぜ今まで聞いたことがなかったのか」と疑うだろうが、理由は、並はずれてメレディスの詩は奥深く、しかも難解なためである。ロバート・ブラウニング（1812~1889）の晦渋とブラウニングに勝る深みがある。本質的に心理詩人であるが、同時に進化論的哲学者であり、この点でブラウニングと異なる。ハーンは講義の一節で、メレディス、ブラウニングなど「観察を以って生命とする客観詩人」は、好むと好まざるとを問わず、広く人と交際し人の行為動作を見てこの活社会を知らねばならない。これに反してテニソン（1809~1892）、ダンテ・ガブリエル・ローセッティ（1828~1882）、スウィンバーンの如き主観詩人は「孤独寂寥の生活を送った」と述べ、客観的詩人と主観的詩人の違いを示し、「かかる（主観）詩人は世人の注目の焦点となって、しかも自らに忠実であることはできない。かかる詩歌は多くの時間となって、しかも自らに忠実であることはできない。かかる詩歌は多くの時間と多くの思想と、沈黙の労働と、あらん限りの真面目を要する。世界と交わる事の少ない程その人の芸術のためには良い。いわゆる世間の娯楽は全く避けねばならない。」（小泉八雲全集 13 巻：田部隆次著『小泉八雲』193 頁）として主観詩人の有様を述べている。そして主観詩人ハーンは、晩年、次第に交際を避ける傾向にあった。
 5. ドイツでの勉強は無駄ではなかった。近代科学の全哲学を真に表現できるのはメレディスをおいては居ない。新しい思想を語っている為、若い思想家たちは理解できないのも無理はない。広い視野に立つ最も進歩的なタイプの思想家で、本質的に楽天主家である。すべての事柄を進化論者として、また宇宙を支配する諸法則は至高の善に向かうという信念にたっている。この世は人の望みうる最善の世界となるべく創られており人間の不

幸や愚行はすべて無知と弱さによる。賢明で強い者にはあらゆる喜びと楽しみを与えうるものと確信。道徳力—激情や衝動を抑制する力—の義務を説く。

6. メレディスには憐憫というものがほとんどない。極めて厳格な教師であり、弱者に同情したり無知を赦したりすることは決してない。
7. 神学上の神のことは語らない。少なくとも信仰の対象としての神については決して語らない。しかし、詩からの印象では、宇宙の働きを神聖なものと考えているようにも思われる。
8. 長い詩編は相当に難解であり、散文意識に加えてかなりの説明を要する。
9. 女の過ちは男の過ちとは比較にならぬほど悪しきことである。社会と道徳と進歩に及ぼす害という点から、そう言えるのだ。社会は家族を基盤にして成り立っている。社会が外敵から身を守る力、富を蓄積する力、幸福を見出す力は、子供に注がれる配慮と愛情に依存している。一国の国力は若者に向けられる配慮と愛情に比例する。そして、子供たちの利益に注意を払うのは、とりわけ母親の義務である。したがって、母親の貞操観念の弱さは、家族という生命そのものが被る傷を意味する。社会全般の利益は、その社会を構成する女性の貞操と優しさと強い道徳心によっており、ひとたび女性の道徳心が揺らげば、民族の崩壊が始まる。社会の道徳的進歩は、男の手によって直接もたらされるのではない。それは、女を通し、また子供の教育を通して持たされるものであり、優しさと家庭愛によってもたらされるものなのである。貫通は男の場合には許されても、女の場合には人類社会に対する過失大なるがゆえに、決して許されない。

メレディスには、出自を明らかにしない一面がある。仕立屋であったが破産し子供に貧乏生活を強いてしまった凡庸な父に恨みと軽蔑に近いものを抱いていたようである。ハウスキーパーを後添いに迎えた父とは別に、孤独で不遇な境遇な幼少期を、母の僅かな遺産を基にドイツのモラヴィア系宗派の学校で約 2 年を過ごすことになる。が、思いの外、ここでの教育は随分と快適で、哲学・心理

学等の思想形成の面でも、後に天職となる文学面の土壌形成でも有用であったようだ。イギリスに帰国し、幾つかの職を経験しているうちに有名な風刺作家 Thomas Love Peacock (1785-1866) と出会い、当時未亡人であったその娘 Mary Ellen に遭遇する。やがて、メレディスは、この年上ではあるが、快活で機智に富み文学趣味もある美人の未亡人に一目ぼれし、やがて結婚し、Arthur という一人の男の子を設ける。が、事もあろうにこの妻メアリーは、メレディスの親友 Henry Wallis と駆け落ちしてしまう。以後メレディスは残された息子の教育に全力を尽くす。(『リチャード・フェヴェレルの試練』参照)

10. メレディスの詩の中で、特に重要と思われる部類のものは、人生全体の哲学を扱った詩である。こうした主題は、たいいてい宗教的で多少教訓的になるものであるが、メレディスのも教訓的ではあるが、宗教的な意味合いはない。宇宙の法則、生命の法則、自然の法則について語るが、いかなる神や宗教の法則について決して語らない。「大地と人間」という詩は、もっと広く宇宙という問題—我々はどこから来たのか、なにゆえに存在しているのか、どこへ向かって行くのかといった、大いなる神秘について考える。
11. 「ウエスタメインの森」という詩の一大教訓は、あらゆる人間が生まれながらに負う義務は、精神と肉体の両面において戦うことである。そこには勇気が必要となる。

ハーンと漱石とデフォー

(くまもとハーン通信「石仏」No. 23 小泉八雲帰化 120 年記念号
p. 23 2016(平成 28 年)4 月より)

ハーンの『英文学史』(ラフカディオ・ハーン著作集 11、恒文社)にダニエル・デフォー(Daniel Defoe or De Foe) (1661~1731) について次のような言及がある。「文筆業とジャーナリズムの世界に於いては実に偉大であった。著書は 250 冊にも及ぶ。英語の文体に広く影響を与えたことは驚嘆である。ある特別な精神と天才的な観察

能力があったからであろう。超人的観察能力とは、様々なことを種類分けして記憶する能力で、40年間に及ぶ新聞記者時代にこの種の知識を蓄積し、事実に関する生き字引であった。さらに、途方もなく豊かな空想力の持ち主で、作り話を実話のように読者に思わせる才能がある。『ロビンソン・クルーソー (*The life and strange surprising adventures of Robinson Crusoe, of York, mariner, written by himself.....*)』(1719)という楽しい物語は、は特に英語が減びない限り、いつまでも生き残るであろうし、文体もその作品の魅力になっている。18世紀初頭以前には存在しなかったような文体で単純明快、装飾的なものは一切、試みようとせず、滑らかで気安く、殆ど口語的であり、それでいて品の悪さは無く、短く、きびきびしており、散文の文体として日本の学生にすすめるの一番ふさわしい作家ではないかと思う。」デフォーには、逮捕され投獄された経歴等があり、ハーン自身、これほどの山師は見つからないだろうと述懐しつつ、他方で、文体については高く評価している。

デフォーに関する評論として、夏目漱石の『文学評論(下)』(岩波文庫)の「ダニエル・デフォーと小説の組み立て」(p. 238)があり、その中でも特によく知られているものに次の例がある。

- a. Uneasy lies the head that wears a crown.
(Shakespeare)
- b. Kings have frequently lamented the miserable consequences of being born to great things, and wished they had been placed in the middle of the two extremes, between the mean and the great. (Defoe)

「双方とも内容は似たものがある。けれども一方は散文になっている。一方は凝った言い廻しかたで、一方は尋常な話し具合である。一方は人を留まらせる、一方は人を走らせる。一方は考えさせる、一方は一字ごとにはきはき片付いて行く…… (略)」

漱石は近代日本語における言文一致体の完成者であり、デフォーは英文学において同様の評価が与えられている。ハーンには「文体

とは個性・人間性なり」という趣旨の記述がある。漱石、ハーン両者ともジョナサン・スィフト(Jonathan Swift, 1667~1745)はデフォーを凌ぐとしている。

「ハーンと漱石と」 (講演会資料より)

*小泉八雲/Lafcadio Hearn (1850~1904)、*寺田寅彦/寅日子/吉村冬彦/藪柑子(1878~1935)、大谷正信/繞石ぎょうせき(1875~1933)、高浜虚子(1874~1959)、河東碧梧桐(1873~1937)、阪本四方太(1873~1917)、*萩原朔太郎(1886~1942)、正岡子規(1867~1902)、松尾芭蕉/宗房・桃青(1644~1694)、与謝野晶子(1878~1942)、与謝野鉄幹(1873~1935)、*嘉納治五郎(1860~1938)、*田丸卓郎(1872~1932)、*西山宗因(1605~1682)、寶井/榎木其角(1661~1705)、森田草平(1881~1949)、小宮豊隆(1884~1966)、鈴木三重吉(1882~1936)、中川芳太郎(1882~1939)、松岡譲(1891~1969)、*野間真綱/奇瓢(1878~1945)、野上豊一郎/白千(1883~1950)、野上弥生子(1885~1985)、夏目鏡子(1877~1963)皆川正禧/真折(1877~1949)、*野村伝四(1880~1948)、*奥太一郎(1870~1928)、*山川信次郎(1867~?)、*長谷川貞一郎(1870~)、*桜井房記(1852~)、*中村是公(1867~1927)、*狩野亨吉(1865~1942)、*中川元(1851~1913)、*秋月悌次朗(1824~1900)、浅井栄瀛(1859~1931)、黒木植(1858~1936)、*渋川玄耳(1872~1926)、*篠本(sasamoto)二郎(1863~)、*大幸(oosaka)勇吉(1866~1950)、米山保三郎/法師/天然居士(1869~1897)、大塚/小屋保治(1869~1931)、安部能成(1883~1966)、坂元雪鳥/白仁三郎(1879~1938)、池田菊苗(1864~1936)、松根東洋城(1878~1964)、安部次郎(1883~1959)、滝田哲太郎/樗陰(1882~1925)、*侯野義郎(1874~1935)、*土屋忠治(1876~1941)、*行徳二郎(1882~1945)、*湯浅孫三郎/廉孫(1873~)、Herbert Spencer(1820

～1903)、William James (1842～1910)、Henry James (1843～1916)、Henri Bergson (1859～1941)、George (1828～1909)、Jonathan Swift (1667～1745)、George Eliot (1819～1880)、Jane Austen (1775～1817)、Charles Dickens (1812～1870)、William Wordsworth (1770～1850)、Percy Bysshe Shelly (1792～1822)、James Murdoch (1856～1921)、Daniel Defoe (1660～1731)、Ernst Theodor Amadeus Hoffmann (1776～1822) : *Lebensansichten des Katers Murr* 『牡猫ムルの人生観』

漱石/愚陀仏 (1867～1916) : いかめしき門を這入れば蕎麦の花／
安々と海鼠の如き子を生めり／凧や海に夕日を吹き落とす／
谷底の湯槽を出るやうそ寒し／董程な小さき人に生まれたし／
行けど萩行けど薄の原広し／秋風の一人を吹くや海の上／
鐘つけば銀杏散るなり建長寺／朝寒み白木の宮に詣でけり

与謝蕪村 (1716～1783) : 菜の花や月は東に日は西に／春の海終
日のたりのたりかな

高井几董 (1741～1789) : 水に落ちし椿の氷る余寒かな

黒柳召波 (1727～1771) : 憂きことを海月に海鼠かな

源実朝 (1192～1219) : 大海の磯もとどろによする波われてくだけ
て裂けて散るかも

金槐和歌集 子規『歌よみに与ふる書』他 10 作品

<子規>与謝蕪村 : 写実的・印象的・技巧的・叙景的・客観的・
絵画的

松尾芭蕉 : 本然的・人生派の詩人 主観的

<朔太郎>俳句(枯淡・寂び・洒脱・風流)嫌い vs 和歌 万葉や新
古今を愛読

蕪村だけ : 浪漫的の青春性 奈良調時代の万葉歌境と共
通主観的でもある

郷愁 子守唄

遅き日のつもりて遠き昔かな 春風や堤長
うして家遠し

青春性(蕪村) vs 静・老(芭蕉)
〈室生犀星〉(1889~1962) 〈芥川龍之介〉(1892~1927) は芭蕉
〈晶子〉 蕪村
・(新)古今和歌集、紀貫之

漱石とハーンの共通点

類似した出自、異文化への関心、社会進化論への関心、超自然(靈的)世界への関心、創作論・創作法、文体・言文一致・歴史的仮名・漢字・ルビ、教師・学者(共通の教え子) 英文学者/文芸批評家、自然主義 vs ロマン主義、英詩・俳句・和歌・連歌・漢詩・文人画、世界文学への関心(比較文学・比較文化論)・モーム、ジャーナリスト、文明批評家、方言・外国語の使用、伝統芸能(能・狂言・歌舞伎・寄席/落語)、民話・伝説・神話(古事記・万葉集、日本書紀、ケルト神話等)、日記・書簡文学、食べ物への関心、「詩と官能」「俳句の型式とその進化」「物売りの声」「自由画稿」自筆絵葉書のやりとり 千駄木時代、齒

Note:

子規門下の大谷正信、高浜虚子、河東碧梧桐の3名は、三高から二高へ 西郷/志田四郎(頼母の養子)柔道の技「山嵐」、講道館、四天王の一人、姿三四郎のモデル(松井利彦 1986『子規と漱石』) ルーツ熊本、勝海舟の書・白虎隊・秋月悌次朗(1824~1900)の油絵の肖像(瑞邦館)

地震関係

漱石:

- ・1894(M 27)年6月20日、午後3時過ぎ、大学院生 東京帝国大学の寄宿舎
『猫』:美学者の迷亭に、哲学者・八木独仙を揶揄(やゆ)する調子の台詞
《あの時 寄宿の二階から飛びおりて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな》
- ・1896(M 29)年6月16日、熊本。前夜、青森、岩手、宮城の東北3県地震に大津波。

「三陸大津波」。死者 27000 人余り、全壊家屋およそ 2500、流出家屋 10600 戸余り

- 1889 (M 22) 年 7 月 28 日、熊本市一帯地震 (cf. M6 年 3 月)。死者 20 人、負傷 74 人、全半壊家屋が 400 戸余り。加藤清正築城の熊本城石垣 数ヶ所の崩れ
- 7 月 28 日、ドイツ留学中の友人、美学者 大塚保治への手紙
《或は御承知とは存候えども過日三陸地方へ大海嘯(おおつなみ)が推し寄せ それはそれは大騒動、山の裾へ蒸気船が上って来る高い木の枝に海藻がかかるなどという始末の上、人畜の死傷などは無数と申すくらい、実に恐れ入り》
《義捐金徴収の廻状がくるや否や、月俸百分の三を差出して微衷(びちゅう)をあらわしたという次第に御座候》

寅彦 [1878 (M 11) ~1935 (S 10)] 享年 58 歳

随筆集『冬彦集』等の出版。

- 高知、東京の小学校、高知の中学校、熊本第五高等学校、東京帝国大学卒。
東京帝国大学教授、随筆家。尺八に関する研究、実験物理学、地球物理学。
航空研究所、理化学研究所、地震研究所等に勤務。
俳句・連句、油絵、バイオリン演奏、写真撮影、映画鑑賞等の趣味。
嗜好品：イチゴ、コーヒー、タバコ、甘党。
比較言語学や英語・ドイツ語・フランス語などへの関心。ローマ字論者(訓令式)
天災は忘れた(る)頃に来る
- 1909 (M 42) 年 3 月、欧州留学出発の間際
漱石宛「近いうちに地震があるかもしれません」：その夏、関西に大きな地震があり、「寅彦の予言が的中した」と漱石は友人宛 手紙
- 過去の津波からの教訓。
《前回の津波から更に三十七年経過、その時の津波を調べた役人、学者、新聞記者は大抵もう故人となっているか、さもなくとも世間からは隠退している。今回の津波の時に働き

盛り分別盛りであった当該地方の人々も同様である。災害当時まだ物心付くか付かぬであった人達が、その今から三十七年後の地方の中堅人士となっている。

(中略) 津浪に懲りて、はじめは高い処だけに住居を移していても、五年たち十年たち、十五年二十年とたつ間には、やはりいつともなく低い処を求めて人口は移って行くであろう。》

- ・1923 (T 12) 年 45 歳：関東大震災。火災旋風等の調査に従事
- ・同年 9 月 29 日付け手紙：ドイツ滞在中の小宮豊隆（友人で『寺田寅彦随筆集』の編集者）：調査の必要から昔の徳川時代の大震災火災の記録を調べているが、今度われわれがなめたのと同じような経験を昔の人が疾（とう）になめ尽くしている。それを忘却してしまって勝手なまねをしていたためにこんなことになったと思う。

(松本哉『寺田寅彦は忘れた頃にやって来る』集英社新書)

寺田寅彦の五高の随筆

月見草

高等学校の寄宿舎にはいった夏の末の事である。明けやすいというのは寄宿舎の二階に寝て始めて覚えた言葉である。寝相の悪い隣の男に踏みつけられて目をさますと、時計は四時過ぎたばかりなのに、夜はしらしらと半分上げた寝室のガラス窓に明けかかって、さめ切らぬ目にはつり並べた蚊帳の新しいのや古い萌黄色が夢のようである。窓の下框には扁柏の高いこずえが見えて、その上には今日ざめたような裏山がのぞいている。床はそのままに、そっと抜け出して運動場へおると、広い芝生は露を浴びて、素足につかけた兵隊靴をぬらす。ぼったが驚いて飛び出す羽音も快い。芝原のまわりは小松原が取り巻いて、すみのところどころには月見草が咲き乱れていた。その中を踏み散らして広い運動場を一回りするうちに、赤い日影が時計台を染めて賄所の井戸が威勢よくきしり始めるのであった。そのころある夜自分は妙な夢を見た。ちょうど運動場のようで、もっと広い草原の中をおぼろな月光を浴びて現とも

なくさまようていた。淡い夜霧が草の葉末において四方は薄絹に包まれたようである。どことなく草花のような香がするが何のにおいとも知れぬ。足もとから四方にかけて一面に月見草の花が咲き連なっている。自分と並んで一人若い女が歩いているが、世の人と思われぬ青白い顔の輪郭に月の光を受けて黙って歩いている。薄鼠色うすねずみいろの着物の長くひいた裾すそにはやはり月見草が美しく染め出されていた。どうしてこんな夢を見たものかそれは今考えてもわからぬ。夢がさめてみるとガラス窓がほのかに白んで、虫の音が聞こえていた。寝汗が出ていて胸がしぼるような心持ちであった。起きるともなく床を離れて運動場へおりて月見草の咲いているあたりをなんべんとなくあちこちと歩いた。その後も毎朝まいあさのように運動場へ出たが、これまでにここを歩いた時のような爽快そうかいな心持ちはしなくなかった。むしろ非常にさびしい感じばかりして、そのころから自分は次第にわれとわが身を削るような、憂鬱ゆううつな空想にふけるようになってしまった。自分が不治の病を得たのもこのころの事であった。

夏目先生の俳句と漢詩（寺田寅彦）

夏目先生が未だ創作家としての先生自身を自覚しない前に、その先生の中の創作家は何処かの隙間を求めてその創作に対する情熱の発露を求めていたもののように思われる。その発露の恰好かつこうな一つの創作形式として選ばれたのが漢詩と俳句であった。云わば遠からず爆発しようとする火山の活動のエネルギーがわずかに小噴気口の噴煙や微弱な局部地震となって現われていたようなものであった。それにしてもそのために俳句や漢詩の形式が選ばれたという事は勿論偶然ではなかったに相違ない。先生の自然観人世観が始めから多分に俳句漢詩のそれと共通なものを含んでいた事は明らかであるが、しかしまた先生が俳句漢詩をやった事が先生の自然観人世観にかなりの反作用を及ぼしたであろうという事も当然な事であろう。ともかくも先生の晩年の作品を見る場合にこの初期の俳句や

詩を背景に置いて見なければ本当の事は分らないではないかと思う事がいろいろある。少なくとも晩年の作品の中に現われている色々のものの胚子はいしがこの短い詩形の中に多分に含まれている事だけは確実である。

俳句とは如何なるものかという問に対して先生の云った言葉のうち、俳句はレトリックのエッセンスであるという意味の事を云われた事がある。そういう意味での俳句で鍛え上げた先生の文章が元来力強く美しい上に更に力強く美しくなったのも当然であろう。また逆にあのような文章を作った人の俳句や詩が立派であるのは当然だとも云われよう。実際先生のような句を作り得る人でなければ先生のような作品は出来そうもないし、あれだけの作品を作り得る人でなければあのような句は作れそうもない。後に『草枕』のモニュメントを築き上げた巨匠の鑿のみのすさびきざに彫きざんだ小品をこの集に見る事が出来る。

先生の俳句を年代順に見て行くと、先生の心持といったようなものの推移して行った述ことが最もよく追跡されるような気がする。人に読ませるための創作意識の最も稀薄な俳句において比較的自然的な心持が反映しているのであろう。例えば修善寺における大患以前の句と以後の句との間に存する大きな距離が特別に目立つ、それだけでも覗うかがってみる事は先生の読者にとってかなり重要な事であろうかと思われる。

色々の理由から私は先生の愛読者が必ず少なくともこの俳句集を十分に味わってみる事を望むものである。先生の俳句を味わう事なしに先生の作物の包有する世界の諸相を眺める事は不可能なように思われる。また先生の作品を分析的に研究しようと企てる人があらばその人はやはり充分綿密に先生の俳句を研究してかかる事が必要であろうと思う。

芭蕉去って後の俳諧は狭隘きょうあいな個性の反撥力はんぱつりょくによって四散した。洒落風しゃれふう [#「洒落風」は底本では「洒落風」] 浮世風などというの

さえできた。天明^{ぶそん}蕪村の時代に一度は燃え上がった余燼^{よじん}も到底^{げんろく}元禄の光炎に比すべくはなかった。芭蕉^{かんべき}の完璧の半面だけが光ってすぐ消えた。天保より明治子規に至るいわゆる月並み宗匠流の俳諧は最も低級なる川柳よりもさらに常套^{じょうとうてき}的であり無風雅であり不真実であり、俳諧の生命とする潜在的なるにおいや響きは影を消した。最も顕在的に卑近なモラルやなぞなぞだけになってしまった。これを打破するには明治の子規一門の写生主義による自然への復帰が必要であった。客将漱石は西洋文学と漢詩の素養に立脚して新しきレトリックの天地を俳句に求めんとした。子規は手段に熱中していまだ目的に達しないうちに早世した。そうして手段としての写生の強調がそのままに目的であるごとく思われて、だれも芭蕉の根本義を研究することすらしなかった。ひとり漱石は蕪村の草徑を通して晩年に近づくに従って芭蕉の大道に入った。その修善寺^{しゅぜんじ}における数吟のごときは芭蕉の不易の精神に現代の流行の姿を盛ったものと思われる。〔寺田寅彦「俳諧の本質的概論」〕

- ・寺田寅彦全集に「埋もれた漱石傳記資料」というエッセーがある。五高時代の同僚篠本二郎という鉱物の先生が漱石死後、「腕白時代の夏目君」の思い出と「五高時代に夏目君」の思い出を事細かに記しているものを寅彦におくってきたが、寅彦はそれを紛失してしまい残念に思っているという内容であるが、幸いなことに『漱石全集月報』pp. 189～94, 205～9 に掲載されている。俄かには信じがたい内容であるが、少年時代の夏目金之助の腕白振りが如何なく發揮されており、『坊っちゃん』という作品を彷彿させる。

漱石の『エイルキン物語』

熊本時代の批評後の『文学評論』の鑑賞・批評・批評的鑑賞の原型
理と情の対立 情：文学

「トリストラム、シャンデー」「江湖文学」 [1897 (M30. 3)]

「英国の文人と新聞雑誌」『ホトトギス』 [1899 (M32. 4)]
「小説『エイルキン』の批評」『ホトトギス』 [1899 (M32. 8)]
ワッツ・ダントン Watts Dunton, Walter Theodore. (1832-1914)
『エイルキン物語 *AyIwin*』 (London: Hurst and Blackett)
[(1898 (M31))]

ジプシィの娘シンファイのエイルキンに寄せる思い—全くの自己のない愛、

エイルキンを助けてその恋人・幼友達キンニィを探し、キンニィにかけられた呪いを己の身に移し、二人の愛を成就させるという崇高な愛

—前篇をおおう神秘・幻想主義（小説の下敷き）愛の前に条理が無力 ウェールズの自然の美しさ、詩的・絵画的

漱石の「初物食い」「際物」通俗的な読物にも感心

『幻影の盾』スノードン山中の叙述を材料

[矢本貞幹『夏目漱石—その英文学的側面』]

漱石は、創造力の必要を説く。ロマン主義的文学を擁護する理論の提出

ドワデェ『サッフオ *Sapho*』 Trans. by G. F. Monkshood . London: Greening & Co. 1905 の見返し

トルストイの『復活』

[戸川秋骨「エイルキン物語」序文 [1915 (T.4) 年・5)]

近代の珍書、徹頭徹尾、神秘で幽遠で飽くまで緊張したもので而も可憐なる物語、山中にて乙女のかきならず琴の音、ハムレットの煩悶に類似、ラファエル前派の画を小説化？

ダットンはスキンバアンと Pines の館で居を共に 小説の重要な人物：ロゼッティ

神秘的な迷信に対する近代合理主義と死に対する恐怖、中世世界「天地山川に対する愛着」「芸術的空気」 cf 平田禿木 「文学界」浪漫派

漱石の文藝理論とその創作実践

歴史主義に対立する心理主義に立脚（『作家の態度』明治41年2月）

自由主義的・個人主義的芸術

初期の作品：遊離的浪漫主義の傾向「美」の文藝の様式→自然・人事を感傷的・装飾的→俳諧的態度と深く結び付く

後期：リアリズム 個人心理 →「則天去私」

漱石の個人主義：自由主義的側面に倫理的・封建的側面(明治という時代性)

石山徹郎（1945）『漱石』續日本古典讀本 XII 日本評論社

「間隔論」（「文學論」第4篇 第8章）：

作中人物と讀者との間に存する時間的・空間的距離の問題で一部表現法、一部作品の構成（形態）論

表現法：

「時間短縮法」：讀者と作中人物との時間的距離を短縮する法

「歴史的現在」（「ル」形と「タ」形）

戯曲（ト書き）cf 大熊信行 『文藝の日本的形態』「新聞小説家としての夏目漱石」

田山花袋は「タ」形を不必要なまでに多用一書かれた事柄の实在感を強める効果

「空間短縮法」：

1) 「批評的作物」 創作中に批評的言辞を交える：作中の人生に説明批判を加える

「作家、篇中の人物と一定の間隔を保って、批評的眼光を以て彼等の行動を叙述して成る」ものである。

（根拠）

「讀者を著者の傍に引きつけて両者を同立脚地に置」く手段であり、「此時に當つて讀者の目は著者の目と合し、其耳亦著者の耳と化するが故に、二重の間隔は短縮して其半ばを減ずるに至る」「此方法によつて成功せんとせば、作者自らに偉大なる強烈なる人格ありて、其識見と判断

と観察とを讀者の上に放射し、彼等をして一言の不平なく作者の前に叩頭せしめ（中略）一字一句の末に至るまで悉くわが意に賛同せしめて、始めて能くする事を得べし」と説いている。

2) 「同情的作物」（作品の構成（形態）論に属す。）

作中に一人稱の人物を設けることは、「同情的作物」の一手段

「同情的作物」とは作者の自我を主張せざる作物を云ふ。たとひ自我を主張するも、篇中の人物を離れて主張すべき自我なきを云ふ。 （『草枕』『坊っちゃん』『坑夫』）

上記2つの方法は、「逆行して作家の態度となり、心的状況となり、主義となり人生観となり、発して小説の二大區別となる云々」（『文学論』378頁）

（Cf 岩野泡鳴 一元描写論）

3) 書簡體小説（『文学論』379頁）『行人』のH氏の手紙。『心』先生の遺書（『彼岸過迄』の「須永の話」「松本の話」）

様式（『文藝の哲學的基礎』の「四種理想」）

感覺的なもの（自然及び人間）の形態・色彩・明暗・配合・比例・硬軟・輕重・寒暖・音聲など。

「美」の理想 『草枕』遊離的浪漫主義

感覺的なものが我々の情を引き起こす媒介者として役立つ場合

- i) 物に対し「知」を働かす「眞」の文藝、リアリズムの文藝
- ii) 感情が外物に結びついた場合 徳義的情『善』
- iii) 意志の働きが外物に結びついた場合 ヒロイズムの發動 「壯」の文藝

『野分』餘裕派 低徊派 高濱虚子の短篇集『鶏頭』の序 「美」の文藝

『虞美人草』美・眞・善・壯

「首として思想を涵養せざるべからず（中略）文字の美章句の法杯は次の次の其次に考ふべき事にて Idea itself の価値を増減ス

ル程の事は無之様に被存候」 [明治 22 年 12/31]

1. 対句的表現—対句法、類句法、連語法

漢文的要素のひとつで、対句法・累語・重畳法・類向法（三句以上の同種類の対句を層累する様式）・断層法・連鎖法・承遞・連句とも言われ、連語法・類句法も含む。 [平山参照]

「此間うちは利いたのだよ、此頃は利かないのだよ」と対句の様な返事をする。 『猫』

ラフカディオ・ハーンの文体

- ・アメリカ時代：装飾的—ロチの文体 「ボードレールの旋律的調和とゴッテの絵画的装飾の結合」を模倣

(Beongcheon Yu , 1964, p. 26)

モーパッサン「客観的な作品」vs ロチ「主観的な作品」：ロチに共鳴
（“Plot-Formation in Modern Novels “*Essays in European and Oriental Literature*, 1923 , pp. 141-5）

短編作家としての手法を両者とも認めるが、ロチの方を評価

来日後 日本の精神への調和 <—俳句・短歌のような日本の芸術文化に触れて 暗示的で簡素な文体の獲得へ

モーパッサン「外的感覚の散文」vs ロチ「内的感覚の散文」

モーパッサンを「最高のリアリズム芸術」「簡素な力強さの芸術」を実現している唯一の現代作家とし共鳴。ロチを退ける

“Studies of Extraordinary Prose” 「散文芸術論」

Interpretations of Literature , 1915

文学は感情・情緒の表現・表出である。その効果的な方法はまず、経験したことを直ちにメモし、そのメモに基づいて口語で文章化することである。文を長くすることも可能であるが、最初の内は効果的でない。肝要なのは何度も書き直し、しばらく放置することである。それを繰り返すことにより、重要な箇所や削除すべき不要部分が判明してきて簡潔な文章作成が可能となる。非個人的方法ともいべき暗示方式が良い。読者の感性に効果的に訴える為には作者自身の色々な体験も欠かせない。

著者の考えでは、中年頃までには可能になるということである。

(出典)L. Hearn *On Composition*

ハーバート・スペンサーの文体論の影響および短歌・俳句の翻訳

19世紀思想界で一世を風靡した「社会ダーウィニズム/進化論 (Social Darwinism)」の提唱者であり、内容面での難解さでよく知られている思想家に、ハーンの敬愛するハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820～1903) がいる。スペンサーの文体について「全然何等の装飾も無い、力強い簡明な文体で平易」であると「ヴィクトリア朝の哲学 (*Victorian Philosophy*)」の中でハーンは述べている。また別の箇所、スペンサー (1867) は美的な芸術における進化を信じているとし、ハーンは以下の様に述べている。

社会の進化に伴って不自然さが次第に減少していき、表現の真実さに迫ろうとする傾向がある。(中略) 小説にしても戯曲にしても、それらが一人の人間の個性をいかに忠実に描写しているか、その程度に応じて称賛される
[Plot-Formation]

スペンサーの論文『文体論 (*Philosophy of Style: an Essay*)』の中では次のように、

「文体の真髄は簡潔さにあり、冗長で複雑であると非難され、長い文は読む人を疲れさせる。伝えたい内容が簡潔に適切に配列されていれば効果も大きく結果も良い」という趣旨の事が述べられている。

ハーンは来日以前から既にスペンサー信奉者であったことはよく知られていることであるが、来日後、大谷 (正信) の手を借りて俳句の翻訳を試みたり、同時に他方で死後に刊行された『天の川縁起—その他 (*The Romance of the Milky Way and Other Stories*)』 (1905) などに見られるように短歌の解釈・翻訳も試みており、それまでの例えば、『日本瞥見記 (*Glimpses of Unfamiliar Japan*)』における宍道湖の風景描写などにも観察される 装飾的・華麗な文体が、晩年に向けてさらに簡潔・平明な文体へと変質を遂げている。チェンバレンは、ハーンの商品について『日本事物誌』第5版で「細部における科学的正確さが、繊細で柔和・華麗な文体と、これほどうまく結合している例は他にない」と述べているが、この指摘は風景描写における写実性、印象描写を的確に記していると思わ

れる。晩年にかけて再話物語に重点を置くようになるとハーンの記述はさらに簡潔・平明になっていくが、スペンサー文体論の「心力省減 (Economy of Mental Energy)」という信条が正岡子規の「最簡短の文章は最良の文章なり (If the rule that the best is the simplest holds good in rhetoric,……)」という俳句・短歌の革新的テーゼに影響した、と言われる。

[“Basseo as a Poet,” 『子規全集、第四巻 俳論俳話一』16
「文章の繁簡」132～3頁、及び750～1頁参照 講談社1975]

子規の「筆まかせ」『子規全集 第十巻 初期随筆』の中に、子規の写生論の特質は、「対象へ素手で垂直に迫っていくことを求める方法で、すべての夾雑物と虚飾を排除して僕直に認識の対象を求めるリアリズム」ともある。

…然るに此春スペンサーの文体論を読みし時 minor image を以て全體を現はす、即 一部をあげ全體を現はし、あるは、さみしくといはずして自らさみしき様に見せるのが尤詩文の妙處なりといふに至て……

(「○古池の吟」『子規全集 第十巻 初期随筆 95頁』講談社)

因みに、日野(2009)276頁によれば、ハーンの教え子、大谷正信(俳号 繞石)は1896(明治29)年9月に東京帝国大學文化大學英文学科入学、9日にハーンの假寓を訪問、翌10日に子規庵句会に初参加し子規と初対面、10月26日に子規派初の吟行会。この年よりハーンの日本文化資料収集係となる、とある。ハーンのための古典俳句資料収集を行いつつ、子規の写生修業時代にも行動を共にしていることが判明する。

ハーンは松江時代も含め、熊本時代に特にチェンバレンとのロチやモーパッサンを始めとするフランスの作家や、パーシヴァル・ローウェル、さらにはキップリングなどの文体に関する論争を展開し、他方で熊本市や高等中学校への不満解消に相当な読書や思索を重ねて、短篇への新たな関心を増長させたように思われる。簡潔で時に力強く、しかも余韻・暗示性などを残すという技法は、正岡子規の俳句に観察される写生文体へのスペンサーの影響、つまり、「ことばの節約・経済性」という文体論が新鮮なテーゼとして再認識され、以降のハーンの再話物語執筆に多いに応用・実践されていった

のではないか、と思われる。

小泉節「思い出の記」(『全訳 小泉八雲作品集 第12巻 思い出の記・父「八雲」を憶う』恒文社 p. 36)によれば、俳誌『ホトトギス』が毎号届けられていたという。俳句に関する著作もあることを考慮に入れると、ハーンは、節夫人や友人・知人などの助力を仰いだとしても短歌や俳句の写生文という文体に少なからず影響を受けていた可能性が窺われる。

ジョゼフ・ド・スメは、その著『ラフカディオ・ハーン その人と作品』(西村 1990 恒文社)の中で「ハーンの繊細で感受性の鋭い性質は、(中略) 高雅な芸術に奥深くまで浸された。彼の作品のまねのできない調子、見事な単純化、さまざまな形の、まるでひと筆で書いたような大胆かつ繊細な概括、彩色の節度、細部における優美な写実主義、こうしたことのすべては、この国の芸術、文字による芸術より造型美術に適っている」と評している。

[*ibid.*、pp. 211-2]

また、同著の訳者、西村六郎氏も原著者スメに対し、「特に情緒の表現方法としての俳句に対するハーンの評価をいち早く取り上げたことに、著者の繊細で奥深いフランス的感性を窺わせている。」と述べている。

[*ibid.*、p. 234]

ハーンの本郷時代(1891年11月19日～1894年10月6日) の書簡から

ハーンが熊本第五高等中学校に赴任してからチェンバレンやメイスンなどと頻りに交わされた書簡の中に、文学・文体論等に関する記述がかなり観察される(原文はL. Hearn, *Japanese Letters XV, XVI*, Rinsen Book Co., 翻訳は『著作集第15巻 書簡II, III, 第16巻』恒文社などがある。)ここでは関連する日本語の部分坂東(1998)から引用する。ハーンがこれまで絶対的と良い程崇拝していたロチやローウェルなどへの失望感が次第に増してくる反面、キプリングの短篇や旅行記における簡潔で力強い文体への賛嘆の念が徐々に高まっていくのが明瞭に読み取れるので特に列挙しておく。推定とあるのは英語版に日付が記されていない箇所である。

1892 (明治 25) 年

2月12日(金) チェンバレン宛て： R. キプリングの全盛期の作品は読む価値があること。 [XV. pp. 341-2]

5月28日(土) W. B. メイスン (William Benjamin Mason, 1853～1923) 宛て：
ゾラ (Emile Zola, 1840～1902) やロチなどの小説についての所見。

7月30日(土) メイスン宛て： ロチの『京都一聖なる都』程に京都に魅力を感じないこと、ローウェルの『極東の魂』には太刀打ちできそうにないということ。自分の研究は庶民の心情研究にあること。

11月(推定) メイスン宛て：キプリングの『消えし光』を読んで文明社会では金無くしては生きてゆけないという実感、ゾラの作品を嫌うメイスンに対し『ジュエルミナール』『夢』などの作品名を挙げての読書の勧誘。

キプリングの偉大な文才に対する嘆称、ロチの『東洋の幻想』に対する幻滅感。

12月12日(月) チェンバレン宛て：キプリングの文才に対する賛辞。

12月中旬 キプリング宛て：一崇拜者からの進言として、「鎌倉の大仏」(1892年7月2日「タイムズ」紙掲載)は見事な美しい詩であるから改稿はしないよう要望する旨の手紙を書く。

1893 (明治 23) 年

1月14日(土) チェンバレンより10日付手紙：ローウェルの文体に凝りすぎる習癖と概念や理論を優先して固定観念化させ、そこから演繹的に論じてゆく彼の著述法を批判し、日本人を「非個人的」だと決めつけるやり方に異議。

2月18日(土) チェンバレンより15日付手紙：ロチの『憐憫と死の書』の読後感に「部屋から追い出した小さな梅の木に似ている。かつては芳香を放っていたが、今は病的に見え、さらには病んだ匂いがする。」

チェンバレン宛て：『アフリカ騎兵の物語』を読めばもっと良い評価を下す筈であるとし、最近のロチの仕事は確かに病的になっており、異国趣味の主題を扱ったのみ同時代作家を凌ぐことサー・マロリー (Sir Thomas Malory, 1410 頃～71) の『アーサー王の死』の精読により単純な言葉で人を感動させる重要性を学んだこと。

[XV. pp. 382-4]

2 月下旬(日付不詳)

チェンバレン宛て：ゴーチェの言葉の魔術師としての感覚的華麗さを唱えた上で、これと対照的に素朴で単純な言葉で書かれた小詩を数篇例示し、その魅力を語る。

5 月 10 日(水)頃 チェンバレンからの手紙 (7 日付)：『チタ』は素晴らしい作品であり、装飾的すぎる文体も、熱帯の太陽の下での物語に適応しており、この技量を軽々に捨てるのは惜しいとある。

6 月 4 日(日) 1 日付チェンバレンからの手紙：『日本人の微笑』における英文中での日本語の使用を批判される。
6 月 5 日(月) 著作中の日本語の使用について弁解。「批判に対し実用面では是認するが、ロマンティックな側面において同意できない。語には色彩・姿・品性がある。語には顔・立ち振る舞いがあり、態度や身振りがある。

その時々気分・気性・奇癖がある。色合い・音色・人柄がある。了解不能でも、異国人に言葉が通じまいと外見から、服装・風貌・風変わりの様子から、時に人は感銘を受けざるをえない。

[XV 430]

6 月 10 日(土) チェンバレン宛て：最近、著作は行なわず、専ら読書。(ボスウェル、テニスン、バイロン、スコット、ワーズワース、ミルトン、シェリー、モリエール、フェステル・ド・クーランジュの『古代都市』などを再読中とある。

- 6月12日(月) チェンバレンからの10日付けの手紙：著作の中に外国語を挿入する執筆法は個人的には嫌いだ
が、使用するのであれば読者の理解できる言語に
限るべき。
- 6月13日(火) チェンバレンからの11日付けの手紙：外国語使
用の補足として、語は音楽の音階と同じで、単独
ではそれ自体何の意味もなさず、前後の結合関係
で初めて生きてくるものだとある。ハーンの返書
には、キャロル『不思議の国のアリス』(1863)
やロチの『アフリカ騎兵物語』(1881)の中で、
意味不明の言葉が見事な効果を収めている例に
見られるように、その音等によって想像力に著し
い効果を与え得るものと反論。
- 6月15日(木) チェンバレン宛て：外国語使用について芸術的効
果を力説。
- 6月25日(日) チェンバレンからの22日付手紙に対し、外国語
使用の問題は完敗であり、今後は出来得る限り日
本語を著作の中に導入しないようにすると書く。
- 6月26日(月) チェンバレンからの手紙(23日付)が届く。ロー
ウェルの著作は「余りにも複雑な諸現象を、い
つか二つの抽象的概念の下に統括してしまう態
度に単純な思想と極度に凝った文体」のため好き
になれない、語呂合わせと格言をちりばめた彼の
話し方や彼の凝った読書嗜好と絡めて手厳しい
非難。
- 7月14日(金) チェンバレンからの手紙(11日付)：ロチに対し、
人生を何もかも憂鬱な筆致で描き、「幸福な昔の
日々」にまで、彼のこれまでの人生の自然な成り行
きとしての放縦による嫌悪感と倦怠感を持ち込
んでいる、「擦り切れた快樂主義者」だと批判。ハ
ーンは、『アフリカ騎兵の物語』『憂愁の華』『ロ
チの結婚』『流刑の話』などを挙げ、その優れた
芸術性を称えてロチの文学を擁護し、さらに自分
の嗜好する他のロマン派の作家たち、ゴーチェ、

- ジェラルド・ド・ネルヴァル、ボードレール、フローベル、メリメ等の作品を並べて賞賛する。
- 7月15日(土)頃 チェンバレンからの手紙(12日付)：ロチの人間自体が嫌いな事、特に『お菊さん』は日本女性に対する残酷な侮辱の書であり、許すことができないこと。
- 7月31日(月) チェンバレン宛て：『アリア・マーセラ』は気に入ってもらえる筈だということ。ローウェルは高所に立ってその土地と人々を見下ろす姿勢で執筆していることなど。
- 8月8日(火) チェンバレンからの手紙(5日付)；ローウェルの「現代性」のみを尊重する姿勢や、何事も演繹的に論断する手法に対する厳しい批判。
- 8月9日(水) キプリングの『多くの発明』を送る知らせ。
- 8月17日(木)頃 チェンバレンからの手紙(13日付)
キプリングの「バダリア・ヘロッズフット」における写実描写に対する批判
- 8月23日頃(推定)
チェンバレン宛ての手紙：キプリングの最新作についての所見 [XVI. pp. 14-5]
- 8月31日(木)頃 チェンバレンからの手紙(28日付)：ロチの文学は死にかけた文学だが、ゾラの文学は実際に腐敗しつつあるくされ者だと手厳しく批判。
- 9月1日(金) チェンバレン宛て：ゾラは「ぞっとするほど不快なもの・穢らわしいもの・獣的なもの・忌まわしきもの」の理想主義者であり、今世紀誰も追随することのできない流派を成し遂げた、とするゾラ文学の擁護論について書く。 [XVI. pp. 21-2]
- 10月25日(水)頃
チェンバレンからの手紙(22日付)：
ゴーチェの詩集『螺鈿七宝集』は形式と韻律を完全に成就させた最高作。
- 10月31日(火) チェンバレン宛て：ゴーチェを始めネルヴァル、ボードレール、フローベル、ロチなどの代表作を

- 推奨し、フランス・ロマン派作家への傾倒ぶりを披歴。 [XVI. pp. 54-7]
- 11月23日(木) チェンバレン宛て：推奨したゴーチェの作品群がチェンバレンの好みにあわなくて遺憾に思うこと。
- 12月7日(木) (推定) チェンバレン宛て： ゴーチェの芸術至上主義に対する共鳴と『アリア・マーセラ』の推奨
- 12月13日(水) チェンバレン宛て： ユーゴの詩が簡素であるということには全く同感。
- 12月下旬(推定) チェンバレン宛て：『フランス文学史』の著者セイントペリはゴーチェの短編小説を絶賛しているのに、ボードレールやゾラを酷評していることに対しては絶対共鳴できないこと。
- 1894 (明治27) 年
- 1月30日(火) チェンバレン宛て：キプリングのバラッドには地方色と人情味あふれる的確な調子が常に正確に表現されていることに感嘆したこと。
[XVI. p. 113]
- 2月上旬(推定) チェンバレン宛て：キプリングの『三つの海豹船の歌』の方言俗語を駆使したすぐれた芸術性を称え、100年は続く作家と絶賛。
[XVI. pp. 59-60]
- 2月18日(日) チェンバレンからの手紙(15日付)：ハーンのキプリング評は彼の天才を一層正当に評価している、才能と天才とはまったく異質のものであり、艱難辛苦を成し得る非凡な能力とは一天才ではなく一才能のことである、天才は辛苦せずとも自然に物事が見えてしまうとある。
チェンバレン宛て：日本の詩歌の特質は自己抑制一凝集、単純、芸術的抑制、力強さにあること、キプリングのバラッドを読むと本当にホッとすることなど。
[XVI p. 128]

9月26日(水) (推定)

チェンバレン宛て： キプリングの物語詩(バラッド)は読むたびに感動が増す。

12月16日(日) ヘンドリック宛て：最近ではキプリング、次いでステューブンスンを愛読していることなど。

アメリカ時代における主として文学作品のフランス語から英語への翻訳や、自分自身の関心のある超自然現象や異国情緒にあふれた物語や旅行記などに関する様々な読書体験、さらには東京帝国大学における講義を通じてハーンが己の課題として生涯に渡って真剣に取り組んだ文体錬磨について概観してきた。ゴーチェなどのフランス人作家の影響を受けたと思われる音楽的・美術的・装飾的文体から日本におけるハーン晩年の平易・単純で抑制的・余韻のある文体への変遷過程を辿ってみた。日本理解が深まったとされるハーンの熊本時代に特に文体の変化が生じたとされるが、本稿ではその影響を与えた要因・作品・作家などについて可能な限り言及してきたつもりである。明治という近代社会台頭の時期に、イギリスの「社会進化論者」であるハーバート・スペンサーの簡潔を旨とする『文体論』が日本の伝統的短歌・俳句やハーンの文体にも影響を及ぼしたことについても触れた。このことは、同じ進化論者で「言文一致運動」の提唱者の一人でもある外山正一により「民衆の言葉」を重視するハーンが東京帝国大学に招聘されたこととも決して無縁ではなからう。(Stefan Zweig, *Japanbuch*, p.8)

「ハーンの書物は、もはやペンで書かれたものではなくて、むしろ日本人の使う絵筆で描かれたもののような感じを受ける。……ハーンの中編小説を読んでいると、日本美術の最も優れた宝物である、豊かな色彩に溢れた木版画を思い出さないうけにはいかない。

[Kathleen M. Webb, *Lafcadio Hearn and His German Critics*, p. 126]

[『ハーンの轍の中で ラフカディオ・ハーン/外国人教師/英文学教育』 p. 83 研究社]

ハーンの文体研究者エドワード・トマス(1912)は、チェンバレンの証言として「ハーンの説明は細部の科学的正確さ」「文体の穏やかで選び抜かれた明敏さ」に言及し、さらにヨネ・ノグチ氏の言

葉を用いて、ハーンを「『古き日本』の甘美な美しさと完全に調和した」日本人作家だったと結んでいる。〔飯田操（1912）『エドワード・トマス ラフカディオ・ハーン 一翻訳と研究一』 文化評論出版〕

漱石「自然を寫す文章」

自然を寫すのに、どういふ文體が宜いかといふ事は私には何とも言へない。今日では 一番言文一致が行はれて居るけれども、句の終りに「である」「のだ」とかいふ言葉があるので言文一致で通つて居るけれども、「である」「のだ」を引き抜いたら立派な雅文になるのが澤山ある。だから言文一致は便利ではあらうが、何も別にこれでなければ自然は寫せぬといふ文體はあるまい。けれども漢文くづしの文體が可いか、言文一致の細かいところへ手の届く文體が可いかといふ事は、韻致とか、精細とかいふ點に於て一寸考へものだらうとは思ふ。

韻致とか精細とか言ふ事は取りやうにもよるが、精細に描寫が出来て居て、しかも餘韻に富んで居るといふやうな文章はまだ私は見た事がない。或一つの風景について、テンからキリまで整然と寫せてあつて、それがいかにも目の前に浮動するやうな文章は恐らくあるまい。それは到底出来得べからざる事だらうとおもふ。私の考では自然を寫す——即ち敘事といふものは、なにもそんなに精細に緻細に寫す必要はあるまいとおもふ。寫せたところでそれが必ずしも價值のあるものではあるまい。例へばこの六疊の間でも、机があつて本があつて、何處に主人が居つて、何處に煙草盆があつて、その煙草盆はどうして、煙草は何でといふやうな事をいくら寫しても、讀者が讀むのに讀み苦しいばかりで何の價值もあるまいとおもふ。その六疊の特色を現はしさをすれば足りるとおもふ。ランプが薄暗かつたとか、亂雑になつて居つたとか言ふ事を、讀んでいかにも心に浮べ得られるやうに書けば足りる。畫でもさうだらう。西洋にもやはり畫家の方でさういふ議論も澤山あるし、日本の鳥羽僧正などの畫でも、別に些しも精細といふ點はないが、一寸點を打つても鴉に見え、一寸棒をくる／＼と引つ張つてもそれが袖のやうに見える。それが又見るものの眼には非常に面白い。文章でも

さうだ。鏡花などの作が人に印象を與へる事が深いといふのも矢張りかういふ點だらうとおもふ。一寸一刷毛でよいからその風景の中心になる部分を、すつと巧みになすつたやうなものが非常に面白い、目に浮ぶやうに見える。五月雨の景にしろ、月夜の景にしろ、その中の主要なる部分——といふよりは中心點を讀者に示して、それで非常に面白味があるといふやうに書くのは、文學者の手際であらうとおもふ。

だから長々しく紋景の筆を弄したものよりも、漢語や俳句などで、一寸一句にその中心點をつまんで書いたものに、多大の聯想をふくんだ、韻致の多いものがあるといふのは、畢竟この消息だらうとおもふ。要するに、一部一厘もちがはずに自然を寫すといふ事は不可能の事ではあるし、又なし得たところが、別に大した價值のある事でもあるまい。その證據に、よく紋景などの文をよんで、精しく調べて見ると、隨分名文の中に、前に西向きになつて居るものが後に東向きになつて居つたり、方角の矛盾などが隨分あるけれども、誰もそんな事を捉まへて議論するものも無ければ、その攻撃をしたものも聞かない。で、要するに自然にしろ、事物にしろ、之を描寫するに、その聯想にまかせ得るだけの中心點を捉へ得ればそれで足りるのであつて、細精でも面白くなければ何にもならんとおもふ。一九〇六、一明治三九、一一、一『新聲』一

「漱石全集 第三十四卷」岩波書店、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>)

追想

・漱石の「則天去私」について

最晩年に取り組んでいた『明暗』は未完に終わっている。この作品の中には、漱石が比較的初期の段階からテーマの一つとして、よく取り扱っている男女の三角関係がある。[Henry James の『Golden Bowl(黄金の杯)』が下敷きとされているようである。] 『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』などの作品にも共通して取り上げられているテーマである。親と子などの家族問題、友情、財産に絡む金銭上のトラブルなどもテーマとしてある。漱石の愛する作家の一人にメレディスがいるが、その作品に『エ

ゴイスト（我意の人）』があり、熟読・愛読し、たびたび小品などでも言及している。サマセット・モームは、『世界の十大小説』で取り上げている作品でもあるが、このエゴイズムという心理は間違いなく「人間の生きる根源的なエネルギーの源である」として一概に拒絶できるものではなく、いかに対処していくか、人間にとって熟考すべき重要な哲学的課題の一つである、と述べている。このような個人の力では即座に解決の糸口の掴めない悩ましい人情にまつわる問題からの自己解放の一つとして最晩年に漱石が没頭したものが「漢詩の世界、漢詩創作」であると思われる。避けることのできなかつた不幸な幼少期を漢詩や南画、禅の世界などの中で紛らわせて過ごした漱石の実体験に回帰しているように思われるのである。俗世間的な苦悶からの回避策として、仏閣で坐禅を通して冥想したり、俳句創作や絵画や仏像鑑賞に耽ったりして非人情の世界を模索した漱石の人生の一環であったように感じられる。このような漱石の模索は、熊本時代の漢詩、俳句、あるいは「謡曲」あるいは「温泉旅行」などにも垣間見ることができよう。

・主な参考文献

- 荒正人（1984）『荒正人著作集 第五巻 小説家夏目漱石の全容』三一書房
- 大久保純一郎（1974）『漱石とその思想』荒武出版
- 岡村和江（1963）「近代作家の文体の展望―夏目漱石・森鷗外・谷崎潤一郎・志賀直哉・芥川龍之介・川端康成・堀辰雄を中心として―」時枝誠記・遠藤嘉基監修、森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編集 『講座 現代語 第五巻 文章と文体』所収 238―61 頁、明治書院
- 柄谷行人・小池清治・小森陽一・芳賀徹・亀井俊介（1994）岩波セミナーブックス 48、『漱石を読む』岩波書店
- 柄谷行人（2001）『増補 漱石論集成』平凡社ライブラリー
- 小林英夫（1976）『小林英夫著作集 6・7』みすず書房
- 高浜虚子（2015）『子規句集』岩波文庫

- 塚本利明 (1971) 「III 作家と作品の研究 1 夏目漱石」中島健蔵・大田三郎・福田陸太郎編集『比較文学講座 III 日本近代小説—比較文学的にみた—』61—79 頁、清水弘文堂
- 寺田寅彦 (1997) 『寺田寅彦全集第9巻 随筆9 ローマ字の巻 (邦字表記)』第1期 全17巻 岩波書店
- ドナルド・キーン (2011) 『日本文学史—近代・現代篇二—』中公文庫
- 夏目漱石 (2007) 『文学論上・下』岩波文庫
- 原武哲・石田忠彦・海老井英次 (2014) 『夏目漱石 周辺人物辞典』笠間書院
- 日野雅之 (2009) 『松江の俳人 大谷繞石 子規・漱石・ハーン・犀星をめぐって』今井出版
- 水川隆夫 (2001) 『漱石の京都』平凡社
- 三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳 (1982) 『講座 夏目漱石 第五巻 漱石の知的空間』有斐閣
- 山田一郎 (2001) 『寺田寅彦の風土』高知市民図書館
- 和田茂樹 (1998) 『子規の素顔』愛媛県文化振興財団
- 和田利男 (2016) 『漱石の漢詩』文春学藝ライブラリー 文藝春秋

夏目漱石全集 岩波書店
寺田寅彦全集 全13巻 (1961) 岩波書店
子規全集 講談社

補足：

2016年7月14日(木)に松江市の島根県立図書館にてラフカディオ・ハーン(小泉八雲)関係の資料調査及び収集を行ない、その翌日の15日(金)は、「小泉八雲記念館リニューアルオープン」記念式典及び「小泉八雲記念館リニューアルオープンを祝う会」に出席した。アイルランド駐日大使、松江市長列席の下、国内のハーン研究会グループ、研究者、ギリシャやマルティニークのハーン研究者間で様々な研究交換・打ち合わせを行なった。

この席で、熊本地震による熊本八雲旧居、五高記念館(旧制第五高等学校)破損に対する義捐金が熊本八雲会会長 西川盛雄熊本大学名誉教授に小泉凡記念館長より手渡された。

今後の研究方向として、フランス文学・日本文学における作品/作家との関係の指摘もあった。『小泉八雲、開かれた精神の航跡』（小泉八雲記念館 図録）2016 を入手。

焼津でのハーンシンポジウムの開催、また、ギリシャ人・アイルランド人ハーンの小泉八雲帰化記念 120 年行事の紹介があった。

2014 年度には、ギリシャ、レフカダ島でのラフカディオ・ハーン（小泉八雲）オープンマインド・シンポジウムに参加した。新設された歴史記念館には松江のみならず、熊本大学や五高記念館、熊本八雲旧居等も写真付きで紹介されている。（風光明媚な地中海やアテネ訪問旅行推薦）

*本冊子作製に関する多大なる事務的な労に対し、古川智水、藤川美香の両氏に深く感謝します。

漱石没後 100 年忌 2016 年 12 月 9 日 見性寺、来熊 120 年、
漱石生誕 150 年 2017 年 2 月 9 日を記念して。





あとがき

熊本大学大学院社会文化科学研究科副研究科長

田中朋弘

今年度の社会文化科学研究科 FD 講演会「知の技法の伝承」では、福澤清先生に、「ハーンと漱石と」というタイトルでご講演を賜りました。福澤先生は、1980年に熊本大学教養部の助手として熊本大学にご着任され、1997年に文学部及び文学研究科への配置換えを経て後、2016年度末まで36年間の長きにわたり、熊本大学の教養教育、および文学部、文学研究科、社会文化科学研究科での教育研究に携わってこられました。

今回のご講演では、ハーンと漱石が、ハーバート・スペンサー、ウィリアム・ジェイムズ、アンリ・ベルクソンなどの同時代の欧米の哲学者や、ジョージ・メレディス、ジョナサン・スィフト、ジョージ・エリオット、ジェーン・オースティンなどの小説家にも多くの影響を受けており、なかでもハーンには、スペンサーの影響がとりわけ強かったこと、また二人が共に、俳句に強い関心を持ち、その点において二人を結びつける試みが可能であることについてお話いただきました。

個人的には、漱石が当時の社会的空気もおそらくあって、スペンサーの社会ダーウィニズム的思想にも強い関心を持っていたということを知ることができ、両者の関係についてももう少し詳しく知りたいという意を強くしました。

周知のように、今年度に入って熊本大学をめぐる状況は急激にかわりつつあり、とりわけ人社系各領域それぞれの強みを出すことが求められています。その意味で今回の講義は、「知の技法の伝承」というこのシリーズ全体の主旨にマッチするだけでなく、熊大の人社系が持つコンテンツをどのように展開するべきかについて、考え直す契機を与えていただいたように思います。

最後になりますが、年度末のご多忙の中ご参加いただいた諸先生方、またお忙しい中、ご講演いただいた福澤先生に深謝申し上げます。そして、まえがきをご寄稿いただいた伊藤洋典研究科長、編集の労をとっていただいた社会人大学院教育支援センターの皆様にも改めてお礼申し上げます。

2017年3月1日 発行

「知の技法の伝承」シリーズ⑫

「ハーンと漱石と」

発行 熊本大学大学院社会文化科学研究科

FD 研究会